

Number.9
2010/11

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

News Letter

■ 特集記事1
国際シンポジウム
「観世寿夫とは何だったのか」

■ 特集記事2
シェイクスピア・セミナー
「ハンナ・スコルニコフ氏講演会」

■ 特集記事3
ソルボンヌ大学ピエール・フランツ
教授連続講演会・研究会
「啓蒙の18世紀におけるフランス
演劇 演説・権力・革命」

演劇・映像の国際的教育研究拠点



■ 活動報告
● 西洋演劇研究コース P4
● 東洋演劇研究コース P5
● 舞踊研究コース P6
● 芸術文化環境研究コース P6
● 映像研究コース P7
● 日本演劇研究コース P7
■ 新刊紹介 P7
■ GCOE 研究生活動報告 P8
■ イベントカレンダー P8
編集後記

特集記事 ① 報告

日本演劇研究コース： 国際シンポジウム「観世寿夫とは何だったのか」

2010年9月27日(月) 13:30~18:00 小野記念講堂

53歳の若さで死去した天才的能役者、観世寿夫(1925-1978)の没後33年に当たる今年、観世寿夫と直接相識る、同志的な人々を中心に講師を招き、3部に分けて、その足跡をしのいだ。雨天ながら入場者350名という盛況であった。

第一部「伝統演劇の挑戦」は、寿夫と共に数々の革新的舞台を演じた狂言役者で人間国宝の野村万作、寿夫没後、寿夫の関係者21名にインタビューを試み、各人の貴重な寿夫語録を収録したオハイオ州立大学教授のシェリー・フェノ・クイン、学部学生時代に寿夫の知己を得た能楽研究者竹本幹夫(拠点リーダー)を講師として、竹本と共に寿夫の聲咳に接した演劇家・岡本章明治学院大学教授の司会によって、伝統演劇の演じ手としての寿夫を論じた。野村万作が関わった武智鉄二演出「月に憑かれたピエロ」の、寿夫の演劇体験の出発点としての意味が論じられ、また世阿弥の能楽論とまともに向き合った空前絶後の寿夫の演技論が、現代にまで受け継がれなかった点につき、世阿弥理論を現代能の演出論として大成する以前の夭折であったことが指摘された。

第二部は1977年日仏演劇協会の撮影したジャン＝ルイ・バロー、観世寿夫らによるワークショップ「演劇作業の根拠」の上映と岡本章の解説、観世寿夫の時期を異にした同じ謡(1969年と1976年の〈砦〉)を比較することによってその芸の

変遷を論じた「観世寿夫の芸」(横道萬里雄東京芸術大学名誉教授病気のため竹本が代演)で、寿夫の身体についての実験的考察の意味を持つ。

第三部「観世寿夫と現代」は、冥の会などを通じて寿夫の肉体的変貌を実現した演出家で、東京大学名誉教授・京都造形芸術大学教授の渡邊守章、現代音楽と能とのコラボレーションを試み、寿夫をしてもっと一緒に仕事をしたかったと言わしめた作曲家湯浅讓二、岡本章の三氏が講師となって、竹本が司会を務めた。寿夫が前衛絵画・現代音楽・現代演劇の世界から能の世界へと持ち帰ったものについて、その芸質の変遷に重ね合わせて論じられた中で、湯浅讓二氏は1972年氏作曲の、現代音楽と寿夫の謡による花柳照奈の新作日本舞踊「雪は降る」の音源を紹介され、渡邊守章氏も公私にわたる寿夫のエピソードに言及された。他の講師を含めほとんどの聴衆が初めて聞く事柄で、それだけでも意義深いものがあった。

今回のシンポジウムを通じて、観世寿夫という存在の現代演劇史における意味が解明されたように思われる。すなわち、寿夫は世阿弥の後継者とも言うべき見識を備え、世阿弥の言葉を能舞台の実際に生かし得たほとんど唯一の能役者であったこと、現代演劇が能の影響を蒙り、能的な舞台作り





を試行錯誤するようになる傾向の出発点に、寿夫という存在があったこと、また現代演劇の世界に参入することを通じて、寿夫自身が自らの芸境を変貌させていったことが確認された。その足跡を回顧する時、観世寿夫という存在自体が、現代演劇・能楽に対する問題提起であったことが明らかとなる。そして現代の能には、ある意味で寿夫を超えた部分もある反面、寿夫喪失からいまだに立ち直れていない面も厳然として存在すると思われる。

(拠点リーダー・事業推進担当者 竹本幹夫)

特集記事 ② 西洋演劇研究コース：

「ハンナ・スコルニコフ氏講演会」

第1回：『『かもめ』におけるチェーホフによる『ハムレット』の解釈』

2010年9月29日(水) 15:00～17:00

戸山キャンパス32号館321-1教室

第2回：『『ハムレット』の劇中劇』

2010年10月2日(土) 15:00～17:00

早稲田キャンパス26号館302教室



演劇博物館グローバルCOE シェイクスピア・ゼミでは、これまでテキストと文化・上演の関わり方を中心に、内外の著名なシェイクスピア研究者による講演会を開催してきたが、今回招聘したスコルニコフ氏は、シェイクスピアのテキストと文化に関する詳細な研究のみならず、シェイクスピアと絵画、近・現代の劇作家との関連など、非常に幅広い研究により高い評価を得、国際シェイクスピア学会の委員も務めている。本稿は2回に渡って行われた氏の講演会について、その要旨を記すものである。

—『かもめ』におけるチェーホフによる『ハムレット』の解釈—

チェーホフの自然主義の劇『かもめ』は『ハムレット』に対する回答である。チェーホフは『ハムレット』を材源として『かもめ』を書いたため、これら二つの劇は類似点が多い。若き劇作家トレープレフは、ハムレットと同様に、父親以外の男性に恋する母親のことで悩み、好きな女性からは拒絶される。また、劇中劇が効果的に使用される。『かもめ』の第1幕で上演されるトレープレフの劇、即ち、劇中劇は、『ハムレット』の劇中劇と同様に、劇全体の枠組みと関係がある。トレープレフの母は、劇中劇が始まる前に、『ハムレット』第3幕第4場「寝室の場」のガートルードの台詞を引用し、トレープレフはハムレットの台詞を引用して答える。ここで引用された台詞は修辭的で感情的であり、チェーホフの自然主義的な劇の表層に特別な感情を与える。これら二組の息子と母のやり取りは、16世紀と19世紀の二つのテキスト——『ハムレット』と『かもめ』——において呼应し合い、ここにインターテキスト性が見出される。さらに、劇中劇の場面におけるニーナによる月への言及は、『夏の夜の夢』の劇中劇を示唆

し、ここでチェーホフの素人と玄人の劇団員たちとシェイクスピアの職人たちが対峙される。このように『かもめ』における劇中劇を考察することで、シェイクスピア劇における劇中劇の問題が明らかになった。

—『ハムレット』の劇中劇—

『ハムレット』第3幕第2場の劇中劇の場は、今日の上演では時間的制約から一部省略されることが多いが、重要である。この劇中劇はハムレットによって、クローディアスが父親殺しの犯人であることを確かめる目的で上演されたものである。最初に演じられる黙劇——C. J. Sissonの言う殺人場面のフラッシュバック——は、言葉を用いずジェスチャーだけで演じられるため、観客にとって内容は伝わりにくい。その後が続く劇中劇は、修辭的な言葉を用いて演じられ、内容が観客に伝わりやすく、黙劇の内容は理解できなかったかもしれないクローディアスも、ここではその内容を、さらにはハムレットの上演の意図も理解することができ、劇の終幕を待たずに退席する。これこそが、アリストテレスが『詩学』で言う「認知」の瞬間である。つまり、ハムレットはクローディアスが犯人であることを「認知」し、クローディアスは、ハムレットに自身が犯人だと知られたことを「認知」し、「認知」が共有されるのである。そしてこれ以降、アリストテレスの言う「逆転」が生じ、クローディアスは危険分子ハムレットを排除しようとする一方、ハムレットは復讐へと始動し、物語は悲劇的展開へと突き進む。このように劇中劇の場は、「認知」と「逆転」が生じるきっかけとなり、劇全体における転換点となるが、こうした構造にシェイクスピアの斬新な試みが見られる。

(文学部助手・グローバルCOE研究生 本多まりえ)

特集記事 ③ 西洋演劇研究コース:

ソルボンヌ大学ピエール・フランツ教授連続講演会・研究会 「啓蒙の18世紀におけるフランス演劇 演戯・権力・革命」

第1回:「18世紀パリの演劇状況、見ることの革命」

2010年6月28日(月) 18:00~21:00 早稲田キャンパス26号館地下多目的講義室

第2回:「フランス革命期の演劇 その思想と神話をめぐって」

2010年7月1日(木) 18:30~20:30 日仏会館ホール(共催:日仏会館)

第3回:「啓蒙思想と演劇 ユートピアと現実の間で」

2010年7月2日(金) 18:00~21:00 早稲田キャンパス26号館302会議室

啓蒙の世紀として知られる18世紀フランスは、多種多様なスペクタクルが世に送り出された「演劇の世紀」でもあった。そこでは理論・実践の両面から演劇改革が試みられ、さまざまな点で演劇の在り方が模索されていた。しかしその実状は、特に日本では紹介される機会が少ない。そうした中、西洋演劇研究コース(フランス語圏舞台芸術プロジェクト)では、パリ第四大学(ソルボンヌ)教授ピエール・フランツ氏をお招きし、18世紀フランス演劇に関してご講演いただく機会を得た。フランツ氏は、市民劇や革命期の演劇を中心とする18世紀フランス演劇研究の第一人者であり、幅広い視野で刺激的な論を展開されているだけでなく、近年では18世紀フランス演劇のアンソロジー(ソフィー・マルシャンとの共同編著)を出版されるなど、18世紀フランス演劇の普及にも努められている。

第一回目の講演では、「見ること」をめぐって18世紀フランス演劇について概観していただいた(逐次通訳付き)。18世紀は絶対王政の抑圧から解放されたことで演劇が開花した時代であるが、それだけにとどまらず、劇場建築や照明等の改革も行われ、「語ること/聞くこと」から「見せること/見ること」へと演劇の重点が移行する時期である。こうした中で生み出された一つのジャンルに集約することのできない多様な演劇形態について、その特徴と問題点が画像とともに詳細に分析され、18世紀フランス演劇の全容が明らかにされた。

第二回目は日仏会館との共催・同時通訳付きで、フランス革命期の演劇についてお話いただいた。社会そのものが壮



大な「舞台」と化し、また革命(の思想)が劇場へと浸透した時代、革命と演劇は混同され、「演劇の神話化」が起こる。その一方で、演劇はイデオロギーに奉仕するツールともなっており、革命期に好まれたレパトリーや劇場の実状からは、革命と演劇との複雑な関係を読み取ることができる。連続性と不連続性、神話とイデオロギーとの間にあって完全には統制しきれないものが「革命の演劇」ではないか。革命期の演劇が、結果的に演劇の本質とその機能そのものを問うことになっているという指摘は大変刺激的であった。

第三回目は使用言語がフランス語のみのセミナー形式で、啓蒙思想という視点から、18世紀フランス演劇についてお話いただいた。デイドロやヴォルテールは啓蒙思想家として知られるが、演劇分野においても多大な功績を残している。特にデイドロはその演劇理論によって、ヴォルテールは実践の場での演劇改革によって、後世の演劇に影響を与えることになる。彼らの「闘い」の意義とその問題点を検討する有意義な研究会であった。

本プロジェクトでは、昨年度に17世紀フランス演劇の専門家を招いてご講演いただいているが、今回の連続講演会は、17世紀演劇との比較という点でも興味深いものであった。

(研究助手 奥香織)



■比較演劇研究(秋葉裕一)

本プロジェクトでは、日本におけるプレヒト受容研究の一環として、「日本の新劇とプレヒト受容をめぐる」と銘打つインタビューを重ねてきた。今年度は、早川書房で演劇書や演劇誌『悲劇喜劇』の編集に携わってこられた高田正吾氏に、日本の現代演劇の舞台を回顧していただいた。高田氏は、戸板康二、尾崎宏次といった演劇評論家のもとで育ち、豊富な観劇歴を持つ。氏の語る演劇界のさまざまなエピソードは、きわめて興味深い記録である。インタビューには池袋小劇場主宰の関きよし氏にもご参加いただき、適宜、お話に加わっていただいた。インタビュー報告は、これまで同様、刊行物として残す予定である。

日時：2010年7月19日(月) 16:00~18:30

場所：早稲田キャンパス51号館4階06B号室

インタビュー ゲスト：高田正吾(早川書房編集者)

当プロジェクトを主宰する秋葉は8月3日から19日までドイツに研究出張し、トリア大学のシュタンカ・ショルツ教授やカールスルーエ大学前研究員ヨアヒム・ルケーゼ博士と研究交流を図った。その成果の一端は「日本におけるプレヒト受容—井上ひさしの場合—」と題する記事にまとめ、プレヒト・センター発行『三文冊子』2010年第4号に寄稿した。プレヒト・センターはプレヒトの生誕の地アウクスブルクに本拠を置いており、『三文冊子』はプレヒト研究者の情報交換の場となっている雑誌である。

なお、ショルツ教授は本年10月から交換研究員として来日、早稲田大学で日本演劇の研究を進めている。これまでも日本での研究滞在の豊富なショルツ教授であるが、今回のテーマは、日本の現代演劇、とりわけ政治劇に焦点を当てている。半年近くにわたる滞在中に日本の演劇人やGCOE研究者と密に交流できれば、と望んでおられる。

■ベケット・ゼミ(岡室美奈子)

ベケット・ゼミでは7月3日、9月7日の2回のゼミで2011年度にグローバルCOEから刊行予定のベケット論集についての打ち合わせを行い、10月16日のゼミでは研究発表を行った。

発表者：長島確「ベケットとヨン・フォッセ」

川島健「The Old Tunesをめぐる」

■ポストコロナル演劇研究会(澤田敬司)

日時：2010年7月14日(水) 18:00~19:30

題目：「映画と国民に関する一考察」

場所：早稲田大学国際会議場共同研究室7

発表者：葛西周(東京藝術大学音楽学部音楽環境創造科教育研究助手、GCOE研究生)

日本の近代化の過程で、「美談」を伝えるメディアとして音楽作品が機能した様相に焦点を当てた研究発表が行われた。内地で「美談」が音楽創作に組み込まれ、主に明治~太平洋戦争期に出版・発売された唱歌集や楽譜、新聞雑誌、レコードなどを資料として事例を抽出し、統治政策との相互作用がいかに働いたか、そこにはどのような国家のイメージ戦略がみられるかが明らかとなった。

■フランス語圏舞台芸術研究プロジェクト(藤井慎太郎)

本プロジェクトでは、引き続き、ミシェル・ヴィナヴェールの戯曲 *Dissident, il va sans dire* を読む研究会を開催した。2010年6月以降、これまでに行われた研究会は以下の通りである。

日時：2010年6月14日(月)、6月21日(月)、10月4日(月)、10月18日(月)、10月25日(月) 13:00~14:30

場所：戸山キャンパス33号館第2会議室

また、18世紀フランス演劇研究の第一人者であるピエール・フランク教授(パリ第四大学)を招聘しての連続講演会・研究会を開催した(特集記事3)。

■シェイクスピア・ゼミ(冬木ひろみ、本山哲人)

日時：2010年7月17日(土) 15:30~17:00

題目：「笑いの再生：上演から見る道化の演じ方」

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

講演者：阪本久美子(日本大学生物資源学部准教授)

シェイクスピア・ゼミが研究を推進してきた「テキストと上演」というテーマを、これまで以上に直接的に検討する講演会となった。上

演をテキストの身体的・肉体的具現化として捉えた場合にどのような問題点と可能性があるのか、これまで活躍してきた役者を例にしつつ論じられた。また、笑いという時代固有の要素を現代の舞台においてどのように再現していくことができるのかを考察することで、文化的に異質なものとなったテキストと上演という、これまでとは違った角度からテーマを捉えることが出来た。

日時：2010年10月9日(土) 14:40~16:40

題目：「シェイクスピアを編纂する」

場所：戸山キャンパス32号館322-1教室

講演者：大場建治(明治学院大学名誉教授)

シェイクスピア劇の版を編纂するためには、何が課題となり、どのような作業を行うことになるのかという問題について、シェイクスピア学者として第一線で活躍し続ける大場氏に、The Tempest TLN 1786のwise/wifeの問題などを具体例に、考察をしていただいた。特に、編纂作業において、戯曲解釈や実際の上演ということがどのような意味を持つていくのが検討され、これを通して、シェイクスピアのテキストをどのように捉えたらよいか明らかとされる刺激的な講演会となった。

■オペラ/音楽劇の総合的研究(丸本隆)

オペラ研究会では、月に1~2回の研究会を中心に活動を行っている。2010年度7月以降に行われた研究会は以下の通りである。

日時：2010年7月28日(水) 15:00~17:00

題目：「ロマン主義オペラにおける「魔」のキャラクター——ドイツとイタリアの比較を中心に——」

場所：早稲田キャンパス8号館305会議室

発表者：山本まり子(GCOE研究協力者、聖徳大学音楽学部教授)

「異界の音楽表現」に着目し、オペラにおける魔的形象、音楽と文化的背景、時代様式との関わりが検討された。ヴェーバーの《魔弾の射手》、フンパーディンクの《ヘンゼルとグレーテル》、ヴェルディの《マクベス》が取り上げられ、その表現手段の比較が行われ、活発な議論が展開された。

日時：2010年10月13日(水) 17:00~19:00

題目：「19世紀イタリア・オペラにおける旋律とことばの関係をめぐって」

場所：早稲田キャンパス11号館814教室

発表者：森田学(国立音楽大学大学院講師)

「19世紀イタリア・オペラ(ロッシーニ~ヴェルディ)」は、今年度のオペラ研究会の重要テーマの一つである。今年6月、このテーマのもと、同講師による講演会が行われたが、今回はその第二弾として「リリック・フォーム」および詩行と旋律の関係に光が当てられた。

■アイルランド演劇研究会(三神弘子)

日時：2010年7月3日(土) 15:00~18:00

題目：テーマ：Dancing at Lughnasaにおけるフィクションとしての語り

場所：早稲田キャンパス11号館1453共同研究室

発表者：栗林景子(早稲田大学大学院)

アイルランドを代表する劇作家であるBrian FrielのDancing at Lughnasaについて、特にその語りの形式と役割についての研究発表がなされた。

■17世紀フランス演劇研究会(オディール・デュソッド)

2011年3月に出版予定の『17世紀フランス演劇事典』の執筆、編集の作業を進めている。17世紀の作品を理解するのに必要な知識の項目とその説明、およそ250の劇作品についての解説と梗概から成る2部構成である。また、当時の文化一般や、本編で紹介できなかった演劇についての総合的知識について、読み物風のコラムにまとめる準備もしており、編集会議を兼ねた研究会を月一回行っている。2010年6月以降、これまでに行われた研究会は以下の通りである。

日時：6月26日(土)、7月31日(土)、8月5日(土)、9月11日(土)、10月2日(土)、15時~18時

場所：文学部デュソッド研究室

研究会では、編集会議の他に、トリストラン・レルミット、ロトルー、メレ等、17世紀の作家についての考察・議論等も行った。

(研究助手 奥香織・菊地浩平)

東洋演劇研究コース：

活 動 報 告

■ 第四回スタニスラフスキー・システム研究会

日時：2010年7月10日(土) 14:00～15:30

会場：早稲田大学国際会議場第一会議室

テキスト：陳世雄『三角対話』第七章(廈門大学出版社、2003)

発表者：平林宣和(GCOE事業推進担当者)・赤木夏子(東京大学大学院・GCOE研究生)

東洋演劇研究コースの近現代部門では、昨年度より、ゼミ形式でスタニスラフスキー・システム研究会が行われている。第四回目は陳世雄『三角対話』第七章の閲読とメンバーによる発表及び討論が行われた。『三角対話』は中国のスタニスラフスキー・システム受容を包括的に考察した唯一の専門書であり、第七章は1950年代末から文革前夜までの間に発生したスタニスラフスキー・システムをめぐる論争を取り上げている。中ノ関係が変化する中で、中国の伝統演劇とスタニスラフスキー・システム受容との衝突から出発し、様々な俳優演技論の言説が再検討された状況が詳しく紹介されている。討論では、例えば書中で取り上げられている座談会(北京と上海)がスタニスラフスキー・システムと関係あるのだろうか、また梅蘭芳のスタニスラフスキー・システムの応用に関しては、それ以前に既に同じような試みがあったのではないかと、といった内容が論点となった。活発な討論が行われた研究会は、政治体制が変わりつつあった中国におけるスタニスラフスキー・システム受容の変化を知る上で、意義あるものであった。

■ 前期定例会

日時：2010年7月10日(土) 16:00～17:30

会場：早稲田大学国際会議場第一会議室

題目：「敦煌講唱作品の音楽的形式—韻文的構造の分析を中心に」

発表者：橘千早(GCOE研究生)

題目：「曹禺と早稲田大学演劇博物館」

発表者：鈴木直子(演劇博物館助手・GCOE研究生)

東洋演劇研究コースの前期定例会では、夏期休暇中に中国の国際シンポジウムで発表する予定の研究生のためにプレ発表の場を設けた。山西師範大学戯曲文物研究所主催のシンポジウムに参加の橘千早氏は「敦煌講唱作品の音楽的形式—韻文的構造の分析を中

心に」、曹禺生誕百年記念国際シンポジウムに参加の鈴木直子氏は「曹禺と早稲田大学演劇博物館」というテーマで発表を行った。参加者から多くの意見が出され、発表者は貴重なアドバイスを得ることができた。

■ 2010年度第二回共同ゼミ

日時：2010年10月2日(土) 14:00～15:00

会場：早稲田キャンパス6号館318教室

題目：「論中国現代話劇之建立(1918～1929)」(言語：中国語)
(「中国現代話劇の成立について(1918～1929)」)

発表者：向陽(南京大学大学院・GCOE研究生)

東洋演劇研究コースの共同ゼミでは、研究生を対象とした博士論文経過報告及びその研究指導を行っている。今回は来日調査中の向陽氏(中国南京大学大学院に在籍)が博士論文「中国現代話劇の成立について(1918～1929)」について、民国期(1920年代)の資料収集の整理成果とこの時期の演劇現象に対する関心や問題点を取り上げながら報告した。東洋演劇研究コースは南京大学と多くの交流を交わしている。GCOE研究生である向陽氏の来日を機に行われた今回のゼミは、日中の研究者が様々な質問、意見等を交わす交流の場ともなった。

■ 特別講義

日時：2010年10月2日(土) 15:30～17:00

会場：早稲田キャンパス6号館318教室

題目：「二十世紀前半の中国南方の話劇運動について」

講師：間ふさ子(福岡大学人文学部准教授)

方言と近代の話劇運動との関係に着目し、20世紀前半の中国南方の話劇運動を研究してきた間ふさ子先生にご講演いただいた。講演では、演劇と言葉の関係が複雑であった日本植民地下の台湾とイギリス植民地下の香港についての言及があり、舞台記録の欠如によって再現することが難しい近代演劇の研究手法、中国近代演劇(話劇)の啓蒙性、芸術性、娯楽性等について参加者たちと意見交換が行われた。

(研究助手 李宛儒)

舞踊研究コース：

活 動 報 告

■ バレエ研究プロジェクト第2回研究会(通称：バレエ研究会)

森立子氏にジャン・ジョルジュ・ノヴェール(1727-1810)の『舞踊とバレエについての手紙』というバレエ史において重要な役割を持つ著作について、ご講演いただいた。ジャン・ジョルジュ・ノヴェールは、18世紀における「バレエの改革者」として舞踊史上にその名を残している。とりわけその著作『舞踊とバレエについての手紙』で展開されている彼の舞踊論は、当時大きな反響を呼んだだけでなく、後の時代にもたびたび引き合いに出されて論じられており、その影響力の大きさをうかがわせる。森氏はまずこの著作の成立過程を紹介し、次にこの著作の重要な概念である「アクション」と「パントマイム」という二つの概念に焦点を当てて『舞踊とバレエについての手紙』を読み解くことでノヴェールが理想としたバレエの姿を描き出した。最後に、出席者から盛んに意見や質問が投げかけられ、ノヴェールの著作における概念の問題から、20世紀のドラマティック・バレエ、18世紀の絵画に至るまで活発な議論が展開される充実した研究会となった。

日時：2010年7月3日(土) 15:00～17:00

場所：早稲田大学国際会議場共同研究室7

講師：森立子(自由学園最高学部非常勤講師)

タイトル：18世紀舞踊史再考—ノヴェールの舞踊論

■ 舞踊研究コース第5回研究会

舞踊研究コース第5回研究会では、GCOE紀要に論文掲載を目

指すGCOE研究生の論文指導が行われた。分野・内容・形式全てにおいて多岐にわたる発表者の論文構想に、様々な問題提起がなされ、より充実した学術論文にするために必要なことが明確になった。今後は各発表者が、指導をうけてより充実した論文として完成させることが求められる。研究指導は事業推進担当者片岡康子(早稲田大学客員教授)、客員講師石井達朗(慶応義塾大学名誉教授)・鈴木晶(法政大学教授)、研究協力者吉川周平(京都市立芸術大学名誉教授)。

日時：2010年7月9日(金) 13:30～15:00

場所：国際会議場共同研究室7

発表者	タイトル
稲田奈緒美	日英のコミュニティダンスの現状と背景
渡沼玲史	ポスト・モダンダンスにおける即興の方法
越智雄磨	フランスにみるアメリカのポスト・モダンダンスの影響—クアトウオール・アルブレヒト・クヌストの活動を巡って—
許娟姫	植民地朝鮮における妓生の舞踊活動とその動向
北原まり子	第二の『春の祭典』(マシーン版、1920年初演)に関して
石坂安希	モーリス・ベジャール振付作品初演版《ボレロ》の構図をめぐる考察

(研究助手 渡沼玲史)

芸術文化環境研究コース：

活 動 報 告

初夏から秋にかけて芸術文化環境研究コースで開催された研究会を紹介する。今年度を通じたテーマである文化外交再考に加えて、日本における舞台芸術と人材育成、「所有」概念から芸術と社会との関係を検討する連続研究会を新たに開催する運びとなった。

■文化外交再考 歴史的な形成過程と現在における課題 第2回 イギリスの文化外交政策

日時：6月7日(月) 19:00～21:00

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

講師：ジェイスン・ジェイムズ(ブリティッシュ・カウンシル駐日代表)
湯浅真奈美(ブリティッシュ・カウンシルアーツマネージャー)

5月のフランスに続いて、ブリティッシュ・カウンシルからゲストをお招きしてイギリスの文化外交に関する研究会を開催した。ジェイムズ氏は冒頭に「パブリック・ディプロマシー(Public Diplomacy)」の対象項としての「文化外交(Cultural Diplomacy)」を紹介しながら、イギリスの文化外交の歴史を振り返って頂いた。湯浅氏からは、現在取り組まれている多様なプログラムに関する紹介があった。



■連続ゼミナール 〈所有〉からアートと社会の関係を考える

日時：第1回 6月14日(月) 19:30～21:00

第2回 7月5日(月) 19:30～21:00

第3回 7月12日(月) 19:30～21:00

第4回 10月4日(月) 19:30～21:00

講師：曾田修司(跡見学園女子大学教授)

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室(第1回～第3回)
早稲田キャンパス6号館318教室(第4回)

6月に開講した新たな連続セミナー。前期は、「所有」に関わる基礎文献を読みながら受講者と議論を重ねることで、知識と論点の共有を図った。後期はゲスト講師を招聘し、前期に得られた成果をより深めていく予定である。

■舞台芸術と人材育成

vol. 1 芸術創造団体における研修制度の場合

日時：6月21日(月) 18:30～21:00

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

講師：恵志美奈子(世田谷パブリックシアター)

ヲザキ浩実(あうるすぽっと)

宮崎あかり(NPO法人アートネットワーク・ジャパン)

創造的な舞台芸術活動を行うと共に、実践的な人材を育成していることでも評価の高い3団体から講師を招いて、人材育成プログラムの現状についてお話を伺った。後半部では、会場も含めたディスカッションを通じて、今後の舞台芸術団体の望ましい育成プログラムの在り方が問われた。

■創造都市モントリオールの戦略と課題

ケベック、カナダ、世界の文脈において

日時：9月21日(火) 18:30～21:00

場所：早稲田キャンパス26号館302会議室

講師：シモン・ブロー(カナダ国立演劇学校CEO / Culture Montréal 議長)

通訳：高野勢子

カナダにおけるフランス文化圏であるケベック州で、長年に渡って文化政策の現場に携わってきたカナダ国立演劇学校CEOのシモン・ブロー氏を招いた研究会。国際的文化都市として飛躍を遂げるモントリオールの現状を豊富な数字を参照に分析した他、いかにメディアや政治に働きかけるかについてもご自身の経験を元に豊富な事例を紹介して頂いた。

■舞台芸術と人材育成

vol.2 桐朋学園芸術短期大学の歴史と現在

日時：10月8日(金) 18:30～20:30

場所：早稲田キャンパス6号館318教室

講師：越光昭文(桐朋学園芸術短期大学学長)

聞き手：伊藤裕夫(富山大学教授 / グローバルCOE 客員講師)

6月にも開催した舞台芸術における人材育成をテーマとした研究会の第二回。今回は、俳優座養成所からの長い歴史を持つ桐朋学園芸術短期大学学長、越光昭文氏を招いてその歴史的経緯、及び現在抱えている課題についてお話を伺った。越光氏の講演からは、俳優座時代からの理念が形を変えながらも現在の演劇教育に息づいていること、そして、演劇の実践教育と理論研究が乖離している現在の日本の演劇教育への危機感といった、極めて重要な示唆を得ることができた。

(研究助手 光岡寿郎)

映像研究コース：

活 動 報 告

本コースの中国プロジェクトは、中国の無声映画時代における外国映画の受容を研究テーマにGCOE事業の前身となった21世紀COEより活動を続けている研究プロジェクトである。21世紀COEよりプロジェクトに携わっている事業推進担当者の小松弘教授、城西国際大学の佐藤秋成氏に加え、GCOE事業開始からはGCOE研究生の山本律がメンバーに加わり、現在は三人で研究活動を行っている。

中国における無声映画時代についての映画史は、1963年初版の程季華主編『中国電影発展史』に記載されている内容が多く踏襲されており、あまり見直しがなされてこなかった。これは、戦争や文化大革命などで当時の映画資料の多くが失われ、中国の無声映画時代の研究が困難であることも影響しよう。

しかし中国プロジェクトは、これまで積み重ねてきた研究より、『中国電影発展史』に記載されている内容を見直す必要があることを示す資料や、映画史を新たな角度からとらえる必要性を示す資料など、様々な貴重な資料を発見してきた。

今年度も2010年8月25日より31日まで中国上海市に赴き、上海図書館・骨董市場・古籍書店などで資料調査・収集を行い、新たな資料を発見した。

これまでの中国プロジェクトの成果の一部は、昨年度のGCOE紀要である『演劇映像学2009第1集』における「中国における映画受容——その揺籃期について」と題した山本の投稿論文の掲載などで公開している。本論文は、アメリカで出版されるアジアの無声映画についての書籍においても掲載が予定されている。また同内容については、今年度の6月26日に韓国光州市の全南大学で開催された「日韓次世代学術フォーラム 第7回国際学術大会」においても発表を行った。

今年度からは公開研究会の開催を予定しており、来年度の12月には、本プロジェクトによる国際研究集会の開催も予定している。この国際研究集会では、研究発表以外に、中国の無声映画時代の映画資料の収集家として知られるポール・フォノロフ氏を香港よりお招きし、フォノロフ氏所蔵の中国映画の資料の公開と紹介も行う予定である。これは、世界に現存する唯一の文献などに触れることのできるまたとない機会といえよう。

また来年度は、中国プロジェクトの最終報告として、書籍の出版を予定している。本書は、研究論文以外にも、前掲のフォノロフ氏所蔵の資料など、中国の無声映画時代についての様々な資料の掲載を予定している。(グローバルCOE 研究生 山本律)

日本演劇研究コース：

■講演会「戦中戦後の日本演劇をめぐって」

日時：2010年8月5日(木) 13:00～15:00

会場：早稲田キャンパス6号館318教室

講師：菊池明(道遙協会理事)

聞き手：児玉竜一(事業推進担当者、早稲田大学教授)

日本演劇研究コースで「戦中戦後の日本演劇をめぐって」と題して、菊池明先生(元道遙協会理事)のお話をうかがった。近現代の演劇史をめぐって、実見談と調査研究をどのように整合させてゆく



かという課題は、この先いよいよ大きなものになってゆくと思われる。貴重な証言に触れる機会は、折に触れて設けておきたいと考える。

菊池先生のお話は、ご関心を反映して幅広い。小見出し風に話題を列挙してみれば、十五代目羽左衛門による歌舞伎開眼、戦前の新国劇、本所寿座の小芝居、三階席当日売りの様子、加藤長治先生のこと、初代吉右衛門の口跡、三代目梅玉の出現、古靱太夫の床本の拝み方、栄三・文五郎の「長局」、喜多村緑郎のリアリズム、歌舞伎・新派・新国劇・新劇の客層、丸山定夫と築地小劇場、空襲下の「女の一生」、産業戦士慰問公演……と尽きるところなく、興味津々の細部を有しつつ、当時の劇界の全体像を提示してくださるものとなった。さらに、三田村篤魚翁に身近く接した印象にまで言及していただいた。研究コースに属する若い研究者諸君にも、半世紀以上前の生の証言に触れる貴重な機会となったことと思う。

(事業推進担当者 児玉竜一)

■チェスキークルムロフ出張報告

2009年に引き続き、演劇舞台構造の国際比較研究の一環として、チェコのチェスキークルムロフにおいてバロック演劇に関する調査を行った。チェスキークルムロフ城には18世紀の宮廷劇場が現存しており、バロック期の舞台芸術の復元研究が進められている。この復元研究の中心人物であるチェスキークルムロフ城博物館館

長パーヴェル・スラフコ氏の全面的なご協力のもと、前年から行っている城内図書館と博物館における調査を続行したほか、城内図書館、トシェボニ郷土史資料館、チェスキークルムロフ郷土史資料館の所蔵資料調査を行った。日程は2010年8月15日から22日、参加者は竹本幹夫(演劇博物館館長、拠点リーダー)、ペトル・ホリー(チェコセンター東京所長、研究協力者)、アイケ・グロスマン(フランクフルト大学専任講師、研究協力者)、上田洋子(演劇博物館助手、GCOE研究生)の4名であった。なお、スラフコ氏から、現在構築中の衣裳・小道具のデータベースや、研究成果の出版物など、貴重な資料を多数ご提供いただいた。

(演劇博物館助手・グローバルCOE研究生 上田洋子)

■「アメリカにおける能楽研究」(1)・(2)

日時：2010年9月28日(火) 14:45～16:15、9月30日(木) 16:30～18:00

会場：早稲田キャンパス6号館318教室

日本演劇研究コースにおける能楽研究コースがその目的の一つとしているのが、国際研究協力事業の推進である。この事業に関連して、今年9月、アメリカを代表する能楽研究者の一人であるオハイオ州立大学教授シェリー・フェノ・クイン氏が招待され、二日間にわたって9月28日・30日に「アメリカにおける能楽研究」というワークショップを行った。

ワークショップの第一日に、クイン氏はまず、アメリカにおいて日本学を学ぶ学生の数とその趨勢、学生が関心を持つ分野などを概観した。そして二日目に、氏はアメリカにおける能楽研究の歴史、その主な傾向についての概観を与えた後、アメリカで最近出版された能学研究に関する文献を紹介した。またそのほかにも、クイン氏はアメリカにおける論文の構造を説明し、それについてのワークショップも行った。

近年国際化の様相を示している学術的研究のあり方を考慮したとき、今回のワークショップはアメリカにおける能楽研究の実態を日本に紹介するという重要な役割を果たしたといえよう。このような学術における国際的意見交換の機会が、今後も持たれることが期待される。

(グローバルCOE研究生 ピア・シュミット)

新 刊 紹 介

『人間国宝 九代目 竹本綱大夫 義太夫「木下蔭狭間合戦」竹中砦の段』(COCJ-36280)

CD1枚 解説リーフレット(20頁)付 録音時間：72分59秒

協 力：早稲田大学坪内博士記念演劇博物館、早稲田大学21世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」

発売元：コロムビアミュージックエンタテインメント株式会社

価 格：2,940円(税込)

発売日：2010年6月30日

21世紀COEプログラム日本演劇研究コース(人形浄瑠璃文楽)では、文楽の第一線の演者の協力を得た復曲演奏と研究を活動の柱の一つとしていた。2003年12月1日、早稲田大学小野記念講堂で開催されたCOE公開講座「浄瑠璃」における「木下蔭狭間合戦」竹中砦の段(太夫：九世竹本綱大夫、三味線：五世鶴澤清二郎)の演奏はその成果の一つである。このたびその音源がCDとなり、桜井弘氏(GCOE研究協力者)による行き届いた解説を付されて、コロムビアミュージックエンタテインメント株式会社から発売された。COEプログラムで行われた6回に及ぶ復曲演奏の内、2005年5月の「木下蔭狭間合戦」壬生村の段(COCJ-34039、コロムビアミュージックエンタテインメント株式会社、2008年1月)に続く2本目のCD化である。

「木下蔭狭間合戦」壬生村の段と竹中砦の段は、ともに国立文楽劇場の「文楽素浄瑠璃の会」で復曲初演されたが、早稲田大学での演奏は単なる再演ではなく、COE浄瑠璃研究会の活動と深く関わるものである(詳細は「演劇研究センター紀要」Ⅲ・Ⅴ・Ⅶ・Ⅸの報告等を参照されたい)。特に竹中砦の段は大曲として知られながらも、約七十年間文楽公演での上演がなく、一般に入手できる音源は今回発売されたCDのみである。この浄瑠璃史的にも意義深く貴重な演奏が、容易に鑑賞できることとなった。関係者各位のご尽力に心から感謝したい。

(研究助手 原田真澄)



GCOE 研究生活動報告 サミュエル・ベケットセミナー（ポーランド）にて研究発表

GCOE 西洋演劇研究コース・ベケットゼミに所属する片岡昇、菊池慶子、久米宗隆の3名は、ポーランドのグダンスク大学で5月10日から16日にかけての約一週間にわたって開催されたサミュエル・ベケットセミナーにて研究発表を行った。グダンスクを中心街と会場付近には、ベケットの『勝負の終わり』(Endgame)の舞台写真を使ったポスターがあちこちに貼られ、学会中はテレビ局による取材が行われるなど今回の学会は街を挙げてのイベントになっていたようである。学会のタイトルは「ベケットのテキストに戻る」(Back to Beckett Text)であり、各国からエントリーしたベケット研究者によるテキスト分析を中心とした研究発表が連日に渡って行われた。片岡、菊池、久米の3名も発表者のひとりとして、ベケットゼミで行っている研究内容を英語で発表した。発表者とタイトルは以下の通りである。

片岡 昇 “Integrating the Outside with the Inside: The Structure of View in Beckett’s *Ghost Trio*”

菊池慶子 “Fictional Space and Its Limit in *First Love*”

久米宗隆 “Beckett’s Radio Dramaturgy in *All That Fall*: Jung’s Effect on Beckett”

発表後の質疑応答では司会者や参加者から貴重な意見や感想を頂いたほかに、今後の研究のために有意義な議論を交わすことが出来た。研究発表以外にも、イノック・ブレイター (Enoch Brater)、アントニ・リベラ (Antoni Libera) など著名なベケット研究者による基調講演、作品やテーマごとに行われるワーキンググループ、演劇ワークショップなど多数のイベントが充実していた。また学会では2006年に演劇博物館客員教授として来日したスタンリー・ゴンタースキー (S. E. Gontarski) 教授と再会できたことや、知り合ったベケット研究者と情報交換ができたことなど嬉しい出来事があった。

今回の研究発表にあたってGCOE事業推進担当者である岡室美奈子先生、客員講師のギャヴィン・ダフィ先生には発表原稿を親身になってチェックして頂きひとかたならずお世話になった。また、GCOE事務局の皆さまには出張に関する事務手続きなどでサポートして頂いた。深く感謝を申し上げます。
(グローバルCOE研究生 久米宗隆)

◆国際シンポジウム 映画と演劇におけるピクチャレスク—EVENT— The Picturesque in film and theatre CALENDAR

当GCOE拠点では、2011年1月17日(月)から19日(水)にかけて開催される国際シンポジウム「映画と演劇におけるピクチャレスク」に向けた準備作業が本格化している。映画と演劇に見られるピクチャレスク(絵画的性)を歴史的かつ理論的に考察するという企画主旨に今最も相応しい講師四名を海外から招聘し、映像研究コースの講師二名、日本演劇コースの講師一名も交え、各講師にご講演頂く予定である。ようやく固まりつつあるプログラムをご覧頂ければ、演劇・映像学におけるピクチャレスクというテーマの多様性と奥行きへの深さを実感して頂けるだろう。さらに最終日には、7名のGCOE研究生による発表を巡り、研究生と講師の方々との間で二時間にも及ぶ「ディスカッション」が行なわれる。これは全世界から若手研究者を受け入れ、演劇・映像の国際的教育研究の中枢を担う当拠点ならではの企画である。
(研究助手 大傍正規)

日時：2011年1月17日(月)～19日(水) 会場：早稲田大学小野記念講堂(※同時通訳付、入場無料・要事前予約)

プログラム

2011年1月17日(月)

10:00～10:10 開会挨拶

10:10～11:10 講演 リュック・ヴァンケーリ Luc Vencheri (リヨン第2大学准教授、映画理論)「ピクチャレスク批判、あるいはその映画的残存 Critiques et survivances cinématographiques du pittoresque」(使用言語：仏)

11:10～12:10 講演 児玉竜一(早稲田大学文学学術院教授、日本演劇)「絵画から書割・書割から映画美術」

13:30～14:30 講演 小松弘(早稲田大学文学学術院教授、映画史・劇映画)「映画の二次元・絵画の二次元」

14:30～15:30 講演 スティーヴン・ボトモア Stephen Bottomore (映画作家、初期ドキュメンタリー映画研究)「初期のノンフィクション映画におけるピクチャレスク—カメラマンの貢献 The picturesque in early non-fiction film: the cameraman’s contribution」(使用言語：英)

15:50～17:50 映画上映

2011年1月18日(火)

10:00～11:00 講演 カスパー・チューベア Casper Tybjerg (コペンハーゲン大学准教授、映画史)「際立つ構成—オランダの

無声映画における視覚モデルとしての絵画の使用 Distinguished Compositions: The Use of Paintings as Visual Models in Danish Silent Films」(使用言語：英)

11:00～12:00 講演 ピエール・フランツ Pierre Frantz (パリ第4大学教授、演劇研究)「18世紀における演劇と絵画モデル Le théâtre et le modèle pictural au XVIII^e siècle」(使用言語：仏)

13:30～14:30 講演 武田潔(早稲田大学文学学術院教授、映画理論)「映画の中にある絵画」

14:30～15:30 演劇・舞踊関係のDBプレゼン・ビデオ上映

15:50～17:50 ディスカッション(17、18日の講演内容中心)
登壇者：小松弘(司会)、リュック・ヴァンケーリ、スティーヴン・ボトモア、カスパー・チューベア、ピエール・フランツ

2011年1月19日(水)

10:00～15:00 GCOE 研究生による発表(①佐野勝也②宮本明子③小川佐和子④志村三代子⑤紙屋牧子⑥北原まり子⑦マートライ・ティタニラ)

15:20～17:20 ディスカッション(研究生の発表内容中心)
登壇者：小松弘(司会)、リュック・ヴァンケーリ、スティーヴン・ボトモア、カスパー・チューベア、ピエール・フランツ

編集後記 ニュースレター第9号をお届けいたします。今回はシンポジウムや講演会報告に加え、GCOE 研究生の国際学会発表に関する報告も掲載いたしました。また、2011年1月には大規模な国際シンポジウム「映画と演劇におけるピクチャレスク」が予定されており、現在その準備が進行中です。みなさま、ぜひお越し下さい。
(研究助手 奥香織)

News Letter 第9号

2010年11月15日

編集：奥香織 菊池浩平 大傍正規 原田真澄 光岡寿郎 李宛儒 渡沼玲史

発行者：早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム「演劇・映像の国際的教育研究拠点」

拠点リーダー 竹本幹夫

早稲田大学演劇博物館グローバルCOEプログラム

〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1

TEL: 03-5286-8110

URL: <http://www.waseda.jp/prj-gcoe-enpaku/index.html>